HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第81号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2016-10-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73648
Type	journal
File Information	DRFmonthly_81.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF
Digital Repository Federation Monthly

第81号
No. 81 October, 2016

【 レポート 】第1回SPARC Japanセミナー2016
【インタビュー】CHOR, JSTのOA拡大にむけた試行プロジェクト(千葉大学)
【 連 載 】いまそこにあるオープンアクセス 第20回
「今月の馬鹿げた特許？」

Report 第1回 SPARC Japanセミナー2016

平成28年9月9日、第１回SPARC Japanセミナー2016「オープンアクセスへの道」が開催されました。Nature Communicationsなどのようなハイブリッド誌のゴールドOA化、SCOAP³でのOAなど世界的にゴールドOAが進む中、日本はどうすべきかをテーマに行われた5つの講演とパネルディスカッションについてレポートします。

▲会場の様子

オープンアクセスのあり方、グリーンOAとゴールドOA
土屋 俊 氏 (大学改革支援・学位授与機構)

「明確なのはOAを進めるのはよいことで、実現しなくてはいけないということ」という言葉から講演が始まりました。OAの方法として、かつてグリーンという道があり唯一PubMed Central(PMC)については成功したといえるかもしれないが、その後進展しておらず非効率であること、一方で（OA誌である）PLOS ONEやScientific Reportsは研究者に受け入れられつつあり、こうした広領域誌への日本からの発表論文数は2009年に706件であったが2015年には3500件にまで増えているとのことです。そして、近い将来、出版流通のコスト計算についてOA論文のAPC(Article Processing Charge)総額を積算の核とすべきときが来るのではないかと述べられました。その上で、雑誌や論文の質を保つために何らかの指標が必要とはしつつも、日本もゴールドOAを進めていくべきと語られました。

学術雑誌のキャッシュフロー転換の可能性を探る～JUSTICE/SPARC Japan合同調査チームによる調査結果の概要～ 尾城 孝一 氏（大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)/東京大学附属図書館）

JUSTICEはこれまで大学におけるEJ導入と規模の違いによる情報格差の解消に貢献してきたが、近年OA論文が増えてきたことにより購読費の交渉はAPCを含めて考えなければならないというお話があり、そのために国内のAPC支払額の調査を行ったことが述べられました。調査の結果、現在の購読額をすべてAPC支払に置き換えた場合、今より100億円浮く試算だが、調査対象として抽出した300大学のうち39の大規模大学だけは購読費よりもAPC支払の方が高くなったという報告がありました。今回はフルOA誌に掲載された論文に限定した調査だったそうですが、今後は更にハイブリッド誌のAPC額を把握し調査を続けていくそうです。

SCOAP³による学術誌のオープンアクセスへの転換
安達 淳 氏（国立情報学研究所）

「ぼくの話はお金の話。実践の話。地べたを這うような話」との前置きで、SCOAP³（本誌21号等参照）の進捗が解説されました。

2014年から対象誌のオープンアクセス化が実現した同プロジェクトは、2017年からフェーズ2。スタート時点での対象誌選考はAPC額の入札（ただし単純な価格比較ではない総合評価）で行われましたが、フェーズ2では条件交渉に基づく随意契約となり、APC額で折り合わなかったIOPP刊行誌の一部が対象誌から外れることになったそうです。同プロジェクトのここまでの成果としては、当初想定よりも投稿数が多く、結果的に1報あたりのAPCが抑えられたことが挙げられる、とのことでした。また、対象誌を読むがそれほどは論文を出さない国では、読みかつ書く国と比較して、有料誌時代の購読額よりもSCOAP³拠出額が低額となり、こうした枠組みは好評だそうです。高エネルギー物理学研究に対する各国の参画の仕方の違い、それと同じ構図が各国の大学間にも存在します。講演は、SCOAP³のような取り組みのさらなる進展は各機関、研究者の意識とアカウンタビリティにかかっているとのメッセージで締めくくられました。

大学図書館におけるオープンアクセスの取組み
荘司 雅之 氏 (早稲田大学図書館)

講演者は、千葉大CURATORとならんで国内最初期に稼働した機関リポジトリDSpace at Waseda Universityを担当されていた荘司氏。

設立当時の課題として、研究者の意識喚起、運営側の業務負担が指摘されました。そのあと、国立情報学研究所のCSI委託事業と、SCPJやDRFの取り組みの紹介があり、機関リポジトリ推進委員会、オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）設立へと続く流れが概観されました。最後に、「THE CHRONICLE OF HIGHER EDUCATION」誌に掲載されて先ごろ話題となった、カリフォルニア大学のオープンアクセス方針の遵守状況についての記事の紹介がありました。いわゆる義務化方針の制定にもかかわらず、同大学リポジトリへの論文登録は発表文献数の25%に留まっているとのこと。初期の課題は今なお課題であるということでしょうか。

生命科学分野における研究者の投稿先雑誌選択趣向とOAへの意味づけ
坊農 秀雅 氏 (情報・システム研究機構ライフサイエンス統合データベースセンター)

あくまで多岐にわたる生命科学系の一部研究分野に所属する者の意見、と強調された上で、研究者視点の論文投稿先選択とOAへの認識について話されました。冒頭から、生命科学系研究者にとってOAとはすなわちゴールドOAであると断言され、また結論でも、研究者からグリーンOAの自発的な動きは期待できず、NIHのような強制力を持った働きかけがない限りは難しいと語られました。投稿先選択にあたっては、PubMed収録誌・高Impact Factorの雑誌でなければ研究業績として評価されづらい現状があり、かつ研究者としても、一度評価・公表されてしまえばそれで良いという認識があるために、グリーンOAの余地としては、PubMedへの収録や、DOI付与によるCitation tracking・統計の可視化、Altmetricsなどのような事後評価のシステムの形成・拡大が鍵となるのではないかと提案されました。

パネルディスカッション / 講演者＋パネルモデレーター 山本 和雄 氏（琉球大学附属図書館)

ここまでの講師全員が登壇して、「グリーンOAとゴールドOAと日本としての対応」と題したパネルディスカッションが行われました。前半は、尾城氏・安達氏の講演内容を基として、ゴールドOAについての議題、特にOAに係るAPCの把握と、購読モデルからの転換の話が中心となりました。現在の日本においては、ゴールドOAを選択するにしろ、基本的には研究費からAPCが拠出されているため、まずその流れや総量を捕捉することで、購読料のOA化費用への転換や、そこに生じるギャップの補填など、より合理的な支払いへの検討・交渉が進められるとされました。またこれに対し、国内ではどのような戦略で進行すべきか、という質問が発せられると、研究者の理解・協力を得るほか、機関として方向性を持って進めることや、出資機関が研究者を誘導する手段を作ることなども提案されました。

この議論の中で、登壇者から、出版者や海外図書館から情報を引き出すために、海外図書館ともネットワークを持つ努力が必要で、かつまたそのための情報発信も必要であり、今回のJUSTICEによる調査もそれを背景の一つとしている、と言及されたことは印象強い点です。また今回のセミナーが、JUSTICEがOpen Access 2020へのExpression of Interestに署名したことの意味を考える良い機会となるのではないか、とも語られました。

他方のグリーンOAについて、プレプリントサーバへの出資が世界的な動きとなっており、出版者でないサーバの存在がカウンターバランスとなるのではないか、という話題が切り口にされました。プレプリントサーバの取り組みは様々な分野に波及しており、そこに貢献している日本の大学についても評価すべき、とされた一方で、プレプリントサーバ(arXiv.org)とSCOAP[3]の両方に資金協力をするのはダブルディッピングとも捉えられかねず、それにどう答えるか準備すべき、という指摘もありました。

IRの方向性については、IRでのグリーンOAには否定的な意見が多くありながらも、小規模な学会出版にとってのOA化の手段や、大学として出版物を捕捉する手段、あるいはオープンサイエンスの受け皿として、IRに期待されている部分も多くあると話されました。また、IRを考えるにしろ、上述のAPCの問題を考えるにしろ、それを理解している図書館が改革を主張し、自らの仕事とすべく飛び込んでいくべきと指摘されました。

▲パネルディスカッションの様子

グリーンもゴールドも、これまでの経験や知識・調査の累積によって、それらを取り巻く様々な問題や議論が見えてきた今こそ、自ら考え、動くべき変化のときであるということを感じさせるディスカッションとなりました。

SPARC JapanのWebページで、発表資料が公開されておるぞ！
http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2016/20160909.html

Interview

CHOR, JSTのOA拡大にむけた試行プロジェクト(千葉大学)

米国を中心に、助成を受けた研究成果のOA化に取り組むCHOR*。このたび、科学技術振興機構(JST)・千葉大学と連携し、日本での研究成果捕捉・OA化の試行プロジェクトが開始しました。その気になる内容について、参画する千葉大学の担当者へ、直撃インタビューを実施しました！

＊CHORとはCHORUS(Clearinghouse for the Open Research of the United States)を運営する団体で、米国に止まらない世界展開を目指しています。

Q　今回、参画されたプロジェクトについて、改めてその目的と実施概要について教えてください

目的は研究助成の成果である学術論文の捕捉とOAの促進です。

今回のプロジェクトでは、プロジェクトに参加している出版社のジャーナルから、**①JSTの助成を受けている　②著者が千葉大学に所属している**の二つの条件を満たす論文を抽出し、そのメタデータを千葉大学の機関リポジトリCURATORに登録します。その際に論文の本文ファイルについては、出版社のWebサイトにリンクを張ることになっています。（著者最終稿ではなく“publicly accessible versions ”)具体的なメタデータのフォーマットや抽出条件・登録条件については、これから検討に入るところですが、原理的には、機械的・網羅的な研究成果の捕捉と"publicly accessible versions "公開が実現可能です。

Q　プロジェクトにおける千葉大学・JST・CHORの役割を教えてください

千葉大学は、大学側の機関リポジトリ運用側として参加し、今回のパイロットの実効性を検証します。JSTが助成団体側、CHORが出版社のとりまとめです。

Q　プロジェクトへの参画を通して期待することや、将来的な展望などがございましたら教えてください

オープンアクセスにおいて、グリーンか？ゴールドか？という議論がありますが、どちらにしても、OA率は決して高くありませんし、そもそも研究成果のモニタリング自体が上手くできていないのが現状かと考えております。どちらの道が望ましいのかという議論はまずは置いておいて、学術情報流通を効率的に捕捉する仕組みをつくることが第一歩かと考えております。そのためには、可能な限り川上から押さえるモデルことが重要だと考えております。一方で実際の運用にむけたサステイナブルなビジネスモデル（コスト負担も含めて）を検討していかなければならないと考えております。

プレスリリース）

○ JST
http://www.jst.go.jp/report/2016/160817.html
○ CHOR
http://www.chorusaccess.org/announcing-chor-pilot-project-japan-science-technology-agency-jst/
○ 千葉大学
http://www.ll.chibau.jp/curator/news/news_20160829_CHOR.html

回答）千葉大学　三角 太郎 氏

国際オープンアクセスウィーク

International OPEN ACCESS WEEK

DATE:
2016.10.24-30

OPEN ACCESS:
OPEN IN ACTION

アメリカのSPARCが主催するオープンアクセスウィーク（OAW）も、今年で10回目を迎えます。10月24日（月）～30日（日）に行われる今年のOAWのテーマは、”Open in Action”。今年もまたDRFでは、このイベントを盛り上げるための素材を募集しています。右のルールに則った作品を、どしどしお寄せください！

ルールはたった2つ:
・ベースはオレンジ(OAWカラー)
・OAW等の文字またはロゴを入れる

送付先：oaw@lib.hokudai.ac.jp
-DRF-WikiにてOAW特設ページ開設中！
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?oaw2016

※PowerPoint等、ファイル内容の変更が可能な一般的なソフトウェア(サイズ自由)で製作して下さい。動画等のマルチメディア作品の場合は特に形式は問いません。

※お送りいただいた作品は、DRF-Wikiに掲載し、だれでもダウンロード・改変・再利用できるものとします。

オープンアクセスウィーク2016　素材募集中！

今そこにあるオープンアクセス　第20回

今月の馬鹿げた特許？

Clear and Present Open Access 20. Stupid Patent of the Month?

8月末、エルゼビア社が取得したオンライン・ピアレビューに関する特許が物議をかもしている。『カレントアウェアネス』も伝えているように、発表の翌日には米国・電子フロンティア財団(EFF)のブログで「今月の馬鹿げた特許(Stupid Patent of the Month)」（あるいは「月間愚劣特許賞」とでも訳した方がいいかもしれない）と酷評され、『クロニクル・オブ・ハイアー・エデュケーション』誌にもこの特許がオープンソース（ケヴィン・ホーキンズも指摘するようにオープンアクセス(OA)の間違いだろう）擁護者に恐怖を与えているという記事が掲載された。パテント・トロールという言葉を使ったブログもある。

何が問題なのか大雑把に言うと、今回の特許は既知の方法に与えられており、エルゼビア社はこれを盾に他社（OA出版社に限らない）を訴えることができてしまうということだろう。エルゼビア社のトム・レラーはツイッターで、「心配するには及ばない。単にわが社独自のウォーターフォール（滝）・システムがコピーされるのを防いだだけ」と発言している。このウォーターフォール・システムというのは投稿論文が掲載拒否になったら自動的に別の雑誌に投稿される（もちろん著者の意向によって）というものらしい。しかし、似たような仕組みはエルゼビア社が特許を申請した2012年6月以前にすでに「カスケーディング（階段状の滝）」ピアレビューとして知られていた。もしこの方式が特許ということだと、かねてから同様のシステムを運用しているシュプリンガー・ネイチャー社にさえ特許使用料を請求できることになってしまう（常識的にはあり得ない話だが）。

不思議なことに、この問題はGOAL、SCHOLCOMMあるいはLIBLICENSEといったメーリングリストでは話題にならなかった。議論が起きたのはオープン・スカラーシップ・イニシアティブ(OSI)というグループのフォーラムである。この特許のどこが新しいのかという疑問の声に対して、エルゼビア社のアリシア・ワイズが次のような回答を寄せている。「オンライン・ピアレビューそのものではなく、わが社の先進的なシステムへの特許である。自社独自のソフトウェアに特許を申請するのはよくある話だと聞いている」

しかし、エルゼビア社の特許取得の狙いがどこにあるのか、疑惑は晴れない。マイク・テイラー（おそらく急進的なOA論者としても知られる古生物学者）は、同社が中小出版社に面倒な訴訟を仕掛けるのではないかと皮肉った。これに対し、フォーラムのモデレーターから警告が出され、他のメンバーからも生産的な議論をしようという声があがった。しかしテイラーは、オープンな学術研究に有害な動きがあるのに名誉毀損を恐れて自由に発言できないとしたら、このグループは何のためにあるのかと反発している。結局、議論は打ち切りになり、この特許に関する疑問は解明されないまま残った。

もちろん、特許自体は公開されていて誰でも読めるのだが、何が特許侵害に当たるのか判断するのは素人には難しいし、時間もかかる。もう少しわかりやすい説明がエルゼビア社からあってもいいと思うのは筆者だけだろうか。

栗山正光
首都大学東京学術情報基盤センター教授
デジタルリポジトリ連合アドバイザー
【Researchmap】
http://researchmap.jp/read0195462

次号予告

[特集] オープンアクセスウィーク 2016
[連載] かたつむりとオープンアクセスの日常 ほか